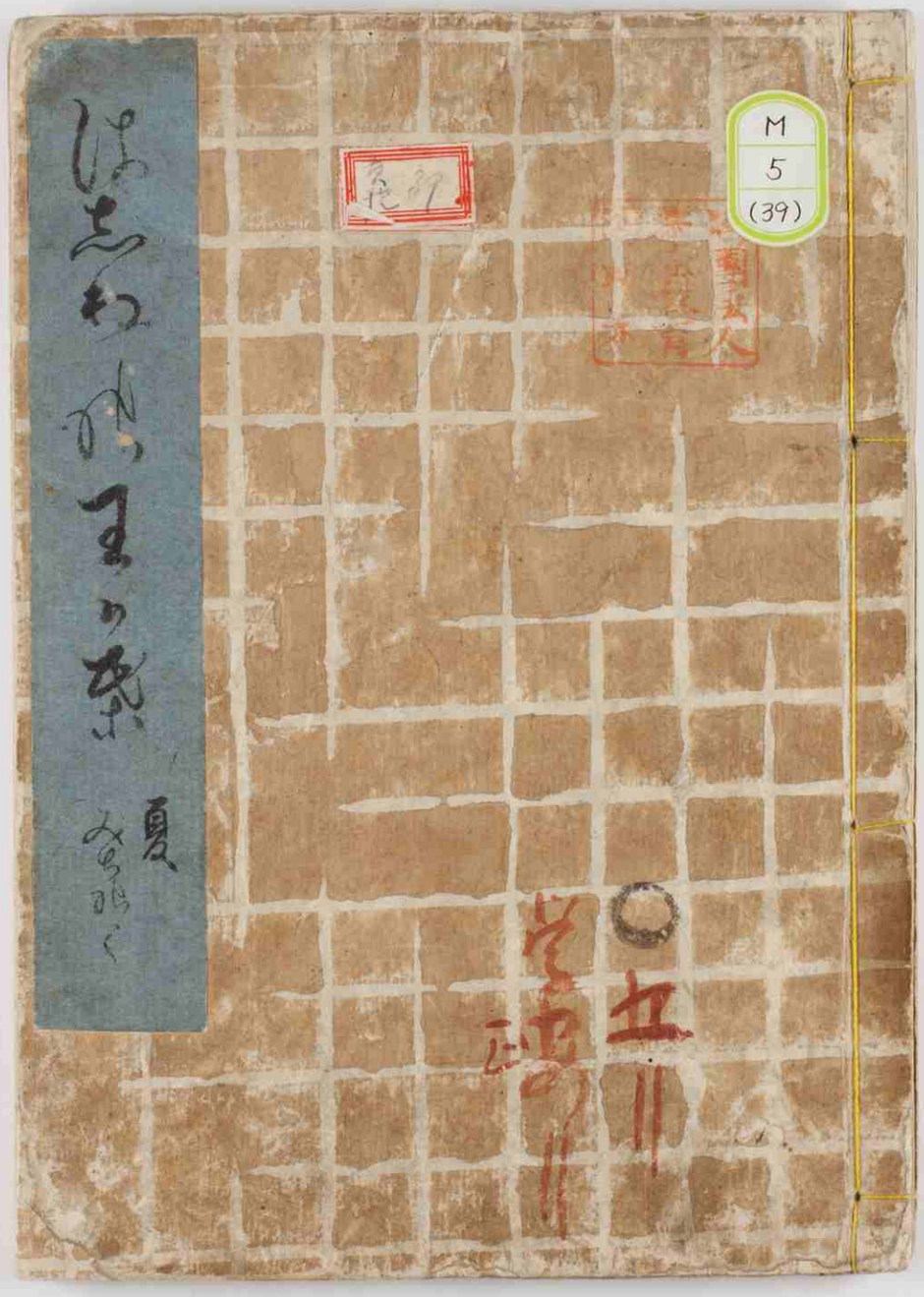
以下　汚れあり



財団法人
東京都教育
図書館

はしりのわかれ　はしうた

はしりのわかれ月の出きるころ。みちちかく。
大原の里。新山川のあたりまで。初櫻を見。また鶴ヶ
亀ヶ。かりくらの山。どとえあり。ある山吹柵。大さ
検断。櫻を見。中尊寺の田樂。祭。さるがう。また華
室中納言の愛女。達谷窟をみしとかや。土御門参邨卿
らうの歌の詠。時鳥の物語。また配志和式社。安日社。
神皇社のゆゑ。また黒介と郷の百歳の老婆の物語。また
石手堰の社。まうでしとど。水無月を小ゆあれば廿日過り九日ゆく
日つぎ石ゆて。麿の石神式社。まうで。阿倍比羅夫。蝦夷朝臣
黒麿。朝臣のとゆ。かくて。河逢の御板せ。まうで。また
多。ここにくるのきとのこ。いまどりるくあるがるん。

なくもいとこゝろあわきめ。

天明八年戊申六月廿九日　　菅江真澄

はしまのわゝ集

いふしやよしのこゝろ、花まちく、洲大原の雲ふ在せ
知月、翔日ふ愛ふ甲、雨の為ありて、已ふ出ぞう晴ふ重
新山川ふて渓同あり、まふ、砂金出ふて濁川ふどふ出ふ
流れしてをゆまかけわゝせは橋どもを三ふ蔵流れくれ花
遠くめでて人かわゝを誘ひ、ゆむ、きれのまて、見つる室根山の
残雪も夜の間ふ雨みけちてく、今朝を見えもふ
初夏つゝふ花ありつゝ、ぱつ花櫻のそつみを色ふき指
ふもとぬゝとうちりゝ
花の咲こゝろを紬してぬぎふ、真弓名ふ
ふを北里ふ駿市ふて、ふふ花をとけう里あるふみちを
あつを群れわる人の中ふ、ぬ雨ふ里て是を見あくふ並ふ家切垣

の内に紅梅の冬を盖けど咲たり、　あき人の花に馴れたるよき
衣をも着ぬ。ものさへ今朝は冬なし、
二日、近隣(チカドナリ)の家なる中垣のあなたに櫻の一本(ヒトモト)生(タテ)るが有るを　めづらしと
よそ目ありき我に来て下枝のみ咲初たり、
冬至卯月のはつざくらそれ咲しきの色とて見通、
近きしあたりにひまく「ねぎ也」とへど冬を日ばろなれば、やまぬ、
三日、人にいざなはれて卅里に遠りぬ、片山里にくれば新
近くや芽出る麻苧(アサヲ)の畠にうちはやす色なる麻衣(アサギヌ)着たる
老(オユ)の枯尾もなきを束ねて持て、それと記しくさりくぞ甚
料にかさぬりと問へばこそ麻生に垂のねぎる呪ひとぞいふ、　山賤が短き裙
の麻衣やぶるの袖をうち濡し涼しさ、　卅畑中にさらもう
かゝる葉櫻の咲たりそれと一枝を求めば老の折てくれたる家(ヤド)に入て、

しばしとて休らひ湯づけたび時を曲(マゲ)て時を鳴ぬ、　めづらしき
折りえてうれし初櫻開きそむる枝しもなきかな、
四日、童ゆきて此地に云紙鳶(テンバタ)を方言(イフ)とぞ、紙老子(シラウシ)の絲(イト)
曳(ヒキ)あひきしらうて時なしぬ、凧巾(イカノボリ)やとなへば、雅慶の嶋などは、七月
十三日を始として秋田の久保田は極月(シハス)の末を始めとし、三河國、吉田は
正月の末より始め五月の五日を上(アガリ)とし、五月五日を紙鳶(セミ)節句と
いへる其の國は十月(カミナヅキ)をはじめとす、琉球誌に見えたり、河岸(キシ)に
大櫻の咲たる根に卅天幟(テンバタ)子どもの糸を引もちひまをすひなどしてゐ
戯もあそぶまゝに櫻の蘂の囀(サヘヅ)る色いかにも春にて心地も今ぞ知らる
花酔(ヱヒ)かしぬ、　うつばりは老が名をわすれつゝばくらめ巣く岩根
花に鳴ぬ鳥も浮たちかへる月あかりしをさし出て花を照せ
景水の面に浮るなど雁の鳴つる音なりけりと見しかは知れつるさつ、

はしたのつゝみかに

月に橋をかけたる風情なり　白妙に霞む雲の通路かと思ふも
危ふき月の夜を送りしかく夕月にみる色多くて大空に乗る
五月芳賀慶明長左衛門が家に在れば朝まだき此花折て来しを
形に添ふ事ともなくて打かへし詠めつゝ此山つゝじを
うちまもりひとりけるが筆とてみるまに　千手か為に咲るにはあらじ桜
花も散りおくれたる此頃を思へば　関香山かにあさ
くらじこころざす色香をもちて花の家ぬしとこそ花のさかり
盛りにあるよし花見に行かむ　欄子用意して酒つゝみ火
縄わするなと云ひ捨て家を出て　鶴が嶺亀が峯鎌倉山なと
小島根をも遠かたに見てくれて　八幡神社あり　ぬかつきぬれば
花ある所に咲ける櫻もまたかさなりぬ　花の枝に知月の
影をそへて見ましを風の吹く事も神垣　慶明　神垣に

咲る花をとりて縄を結ひて久しく神にまうそれへ　ここよりして
うらりあつまりて永き日も暮れすて戻り来つれば小雨さへ降り出ぬ
二日よむかの雨もなごりなく晴て花のあくるの山の端ごとにかかる雲
いと面白し　玉井といふ所にゆきて　ほとゝき飛泉あるとてその
瀧見るなとて過て　ゆけば芳賀慶明のいへれば
出てつゝろちかくみ町けば山吹が椰といふありそが下つ方に杉
の一群を生ひしけれる地ありそこなむ國守吉村公誕生給ひ
ある御館の跡なるよと云ふ　其君ぞこふて　山吹咲けども
散りけり花のちりしく山蔭の雲がまなしをしてこそ見れと云ふ秋
あれども花も相見し海に鳥も以て此譲まするしぬ
男女ゆき通ふ草付る童酒でもあそれはなし　ありける亀山峯
山長泉寺といふ寺あり　山門の左右の柱に　山頂上松遅萬年青

操、前溪水長子古流、こを梅嶺禪師、そあが父母の墓三河の
寶飯郡新城と云郷に寺を建て世世の住持する山門の職も
梅嶺の葬蹟、寺に百十五代、中御門院の時、享保元年丁
酉の秋、庭の菊を見て、　あさかくもくれなゐ
ませふ色そふ庭のしらぎくとかりしつ、北窓のもとに物語せし
當今の世日記ふとあられるよ都人のもとに物語せし
そのころ作りし菊の口語とて殘りぬ　ゆかんの峯尾上も世き
泉寺うもし世ふ引ぬ清きなのれ江とそ行めい桜の枝をふ
班鳩のたまりこまと鳴しまと紅衣着と方言とこあり世信濃
諏方来間のあるとてそれ鳴の蓑笠着と轉で多くも面白
いとあるとりこまとこまとつこまも性ぬ　いるつ江とうしこまとも
ものこまとこまとこまとこまと行と鳴んと著聞集にも見えたり　もの多の一首

ありてまもなくまもなく夏世の道そこ高き水の瀧のもとゆくま
事ふ多き岩ふせられ三つまかれて岩瀧ひそ多まそ
古りある松そも月出ぬ比良ゆく山の麓ゆ来ぬ岩松山經藏
寺といふ世瀧をまなあり　岩うひ去のみとりもも
色もちてそなりぬ　岩うひ去のみとりもも
松井の水ふちたりとあるもみとりに多る流つせ　芳賀氏
世月出山ふ月出やまちくそ　慶四　峯の去
山陰と月出やまちくそ　あき多くとふ
二日ありまでそ　ものもつ　夕くれく鳴り多
云れまる江刺騰澤の山　八瀬大原ゆ花の萬ふこて
山こよ笑出るものとてもも心ゆ
世こそ　情の淺うこざりし　若賀慶明ゆ
花ちぐ　さくはう事て　　見えうくあく頼る

この都をいのりし地蔵也今般の別當に返てと其人言ふを
きゝに夏衣つきそゝころも紫なれしと哉りしけれ其清雅といふ
人あり此時の句に　今の世に春とび風の董れとや　今是なき
遊花花の色をかしと申て遠しけり今も別るゝ　今のべ此櫻は
そのこなた帰る花にわかれ錦そ其のうすもの　かくてかく
田の畔の路を通る馬の毛に二つ長串にさして　やきこめ又わらを
束ね切りやつして是も串につらぬきて田のあぜごとにさしたり　是ぞ
鹿おどしと云ふ古歌に「あをやぎをやきて見し小山田にいつわきたれど
鹿もしれそはあ」是也　燒標をしそれにこがれ　櫻の名をいひつゞく
花に群れて遊ぶを　むらさきの羽風にちらん花の枝を
やきしめそえよ小田のまもる男　葉山權現とまうす神まします
其山の麓に櫻の名所あるを見てしければ　句をいひそへてそれを

夏のはやまに咲くれなゐや見む　遊民なまよは經て猿澤をいふ
此村に来れば或る家ありて新しく造りし花の色よく咲きたり
ここを見まくほしとていかにこころし多ありて遠き國の旅人に是をば傳へ
せむとといふは事佛に似たといふれば皆そろへしく　つれしともなくはいて
出てよりたてぬあまたの花をえらんでく此邑を出れば路のかたはらに
觀福寺といふさつやかな寺あり其堂の傍に高き岩ども群れ
立てるをみあり其岩に虹のごとき橋を掛けて觀音を安置す其堂の前に
あれば此の岩の面に阿羅漢尊者またハ佛菩薩の名號を
彫しまた古歌詩などを多く彫付す西行法師なども此世人をも
見ずかに來て聞ば唯觀れて其事をいれどそをあやしまざるもの
苔むして見えねど苔をはらへば苔の下にあらはるゝ人の面像出るを
以て昔より世事と見えたり半行坂とて昔より此處に榛生坂といふあると、

はしくるあつ集

人ゝ訛りてはく葉生坂とぞいふなる世俗の通ず骨石をその名と錄巻
石で筆の管の太さて二三寸あるを四五寸ばかりにきりてその表裏
引纏ひしる絃車の繆管のごとく拂ひ除れて金をまれこのもと
部品名とて世あり古東山田河津とそ紙漉藏こゝろの葉ある歌で
誹諧祖ばせをの翁のもくの細道などゝる日記を世東山ゝ漉つる紙と
四折りて加れば折りとなりて今ゝこゝを刻冊をつくれどそとゝ
作りの翁もみものく紙とゝ名よめでゝかれるの初むゝ又ゝ岩
蕉のもいまの物し村の垣根を山吹の色ふ埋れ夕日ひげろるゝ
ゝもしかとちさまさ横澤とゝ久る窟あ所とそ籠山と
いの内間廣し石鍾乳とゝの中ゝ撫る迷く桃の咲殘
あ所ゝ所のうの桃源の画ゝ所ゝ所ゝ屏信家浪
八日ゝあく里の寺ゝ所ゝ路ゝ大金とゝ

堪る櫻の二三本ゝ吹さるゝ所ゝ所ゝ所ゝ
の小河ふ流しゝ所ゝ行ゝ石班魚の唱ゝ
ふゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ秋み
鳴ゝ所ゝ所ゝ時もさぶめで鳴ゝ所ゝ方ゝ
ゝ世ゝ所ゝ
水ゝ所ゝ所ゝ山ゝ
北寺の署廣、光明白王院真翰ゝ五國の鳳来寺の額ゝ
ゝを釋迦佛誕生ゝ日ゝ迦の花萱ゝ堂の
ゝ所ゝ所ゝ水盤の中ゝ大衆居ゝ一日經ゝ
ゝ所ゝ所ゝ率堵婆ゝ數ゝ迦の灌佛會
ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ寺
法相三論宗ゝ精舍ゝ曹洞ゝ南朝頃

潮山禪師の高弟無等良雄和尚を万里小路藤房卿の
ら甚世を安ずるの御ことしとて世尊の庭に源頼朝公宴興種し
給ひし梅樹あり幹大なる大梅拾花山
ともいひて世尊の後ろ不灰木石あり石麝ひのき黒蠟石と云名
黒蠟石あるなりて此あらと黒石荘とも云ふ内に
出あるなり妙見山黒石寺として修験寺ひのきを太上神仏を祭り
寺にて大同元年二月聖徳の番匠が集まりて一夜の間に建堂
なりしと云ひし堂あり中に多くの寺の殘
あるあり正月八日の神祭を祇園の削殘尾張の天道社の祭の如
夕方に小夜中まで誰れとなく互に罵詈詬恨をなすあり事
故なくまたまぐれ出て創てうちたる叫きあり火をたくつれば
さぶり積りし大雪もきらきらぐやうにてくるみけもてつるなり

鶏の羽をもろこの甚長三四尺斗の紐捲の二重布の長袋内
蘇民将来の神符を三四寸斗の木に書てそれを手れ
袋に蠟を流し油をぬりて神武神仏の御前に備へ小卧板屋
螺鈿をみがき加持してその長袋を群集の中へ投げれば左右に方
分て素裸に出て猪鼻褌もつけずその袋を取る方へ取るも
此方へ奪ひ取ると上へと下へ捨あひ引ちぎる
褌の前垂と袋の端を持ちてみて力を出せば捨合ひ引ちぎる
陰嚢破れて死する人あれば猪鼻褌をあるまじく
なるも此蘇民将来神符を掌に持て組み其年田白田の祝
豊穣と云て夜ちくとあれば袋を掴破りて取持て雪踏をうき
ちぬくに小河の氷をも破り底へ潜りて多を潜りもとる也止めなと安
めばしきうるし祭も此妙見山黒石寺慈覚圓仁大師の作の薬師佛

佛形を刻みおけるなり、ゆゑを尋ねて、黒石郷より出で、路の傍に四阿
めけり。小屋畫て、その軒に貨銭二貫を長縛に結ぬて掛るに、童
老人、なんどの形、そなへつゝ、守りぬ。銭あやまりて盗れあるこゝ時
母貧しき子あり。よく法にてこれとりてその禍を贖つゝ、貸し出すに
あるべき童に、雷あれば、あるべきせ、副て、伊澤郡に渡る加美川の舟
さくを出でゝ、そなてかりぬ。月にもつくつきあり。二日、村に出て、お智
鈴木常雄の家に入り、

張長月と郡とをかうて紀樂しき

なるまゝ、こゝもしるし。初年祭見て中尊寺に入る。二日、こゝを前、深驥に出
八日、その初年祭見て中尊寺に入る。二日、こゝを前、深驥に出
霊桃寺に詣して、寺の上人、ゆゑ、漆塗の前にあるに、拾ひ
櫻の蘇花咲くを、

拾れ〜拾ひ花の色とうあ〜ちるこの世居
の長〜ありぬ。

こゝの門の大櫻、そこもとる大櫻、社あり、
不動尊を祭れり。そこの一重の山櫻あり。世さて〜〜の志ゝとこ
みそはれば、三尺四五尺めぐりあり。信濃國、市田の大櫻に勝り
ぬべし。こゝを秀衡時代、もとゝ、遠田郡を大櫻と、世村を大櫻と
あるべく、こゝの門に、

雪とつもるこゝ

来る。世を長とて、こゝ多し。近ゝの志賀郡を衣河あり。その玉ゝも
こゝ、世を檢断櫻と名あるこゝ、秀衡の世に檢断の役をする
もの、安倍貞任の館あり。踏を義家公、こゝの
ゆゑ、こゝ、貞任矢つぎぼの返しまゝ、こゝ、
こゝ、こゝ、貞任矢つぎぼの返しまゝ、こゝ、
こゝ、こゝ、貞任矢つぎぼの返しまゝ、こゝ、
世長川、今をむかしと大流の高舘落城の武蔵

坊辯慶衣河を渡りもとそわてしがいちしも浩水てこるぎ波をかわづらひこるものを枝ふつき中の瀬とも云ふ所にて弁慶ふきてこりえ矢ふ武者作り射るに筋を引しくと身ふ射そえれて中流をわ流れそきくこと武者ハ流よそぶいる弁慶一人ぬ止るこるきいたぶ是なるそ寄めの芝業あまれありそこそ流れり事なるく弟ぎさるとい寄ぬ芝業あまれありそこそいやく衣川の末北上川古名加美川の上の方へ義経今加美川の下ふ居ぬそ浩水のき衣河も上川も云ふるのれど弁慶ふ見られ中の流のまりつれど多くの軍ふ射立てれて衣川の節ふ立ぶて衣川の下流れるあと今の世かけて弁慶ハ川上ま流しるとしひ俗きあぶり串さつる鉾りも巻薦てるめを出羽陸奥の方言ふ弁慶出るる武蔵坊の筋を蔓てるひるるを見るるふ串さてる海ふ似るるるとなん里の義の語りめかくく中尊寺ふれいあるる堂の戸

るの如くもて白山姫神社の拝殿をかくかくれ料ふ間廣げふ作りのあふ白き幌をそれなきく帽額引わてあり白きるるるるそひて白き神馬獅子愛しそうなんなどいり童子ふ入れて移り浩るれば白山神の御前ふ幔うちぬけるる舞堂ふもびりてそうそきあり田樂開口祝詞とれば若女舞老女舞るどと高めるれ面やそ衆徒集りもさぶうはぶもりめ法師の頭ふ宿髪てあて髪紅髪墨衣の袖とぬぎかけあふまてでふつみうち笛吹囃ぬこの田樂をそあ舞うば舞ぶどふ事うりて今めくけれど身るる装束国守ふ寄附給ふのをそめてくく奇麗をつてるる今新より風ふが いくく吹つりてあやきふるるびる義りあひる大杉のうれも曲るく吹れ枝葉の義敬れば人ふ敬うあるき義の見て頭るめるりるの名文もるく法師の附髪も吹やれるる扇る風ふぶれてそふれまふく

とゝもなれど、いざ語りかむと立騎く、身大なる杉の枯株の蔭にて頭うち
ぬぐうよう血の流しうかゞなるくの駿きし、經堂光堂の方辺なる人もなく
なる老媼杉そびえ大なる空洞あるを世まゝうゝて香馥るを
ひれば國守めしてみるに、くと銘給ひしとよその木も今を吹折今はあれ
かれなどと人まゝを語る此中尊寺ふ薄墨櫻ありそゝるき花の
ありしぶ枯くなりぬ弁慶さゝとしむ武藏房やうる立ち
も老中尊寺と出て義經堂ふ立ちて人ぬぬぐ源九郎判官の
申来て世ふも寄ふ清悦物語といふことなれうゝて世君の事を
泣ぬるふ記しなる義經蝦夷軍談とふ此の書ふ泉三郎忠衡き
金剛別當秀綱亀井片岡を遣ぬ西家人ふとも強のなくなる松前
渡り秋田治郎尚勝兵粮を運送世人ふ大ふ強ひ蝦夷治りて上國と
なゝて御墓所若君ふ誕生ありて嶋磨君と中尊ふ誕生ありて

人ふと別れく世平泉のお家ふ民家ふ泣
十日ふとさかう舞ありこゝひとゝ一夜ふどあれど風ふぎ雨ふ
世あるふ花のちり残ふも見まゝ櫻原とふれも名さ入ふとふけれども平泉を出ふむし
惡路王ふそふ都登り葉室中納言某卿の娘ふとゝ
おゝけると盗ゝとりて世宮ふ隠れ住けり都人ふまゝふ
一ゝも花の盛ふ飽ふ委て醒ふ姫君櫻原と辺出て くゝ
かれ都ふ昭り給ひしゝと云ひ伊ふ出れ國雄勝郡ふ阿具
昌王が窟ありまゝ世達谷が岩屋と云ふ達谷麻呂が栖家し窟ふ
ふとゝ五串村ふ来ふ世村名を五十嶽ふとゝ夜串ふ
あんふ美麗てふ名ふて山水清く飛泉ふ多ふ雨ふ儼然
けゝ立ふ嚴美神ふ世神ふ神社とて ふゝ瑞玉山ふ奥ふ

舊き宮地の跡殘れり今はそのあたりを水山邑の山王が窟といふ此奥に
平泉野といふ地あり大日山中尊寺の趾高林山法福寺の蹟栗駒山
法範寺の跡尼寺の趾圓位法師の庵の趾あり骨寺の跡あり此あ
たりの寺々もむかし七十四代鳥羽院の御宇天永永久のころなりける
此平泉裡より今の關山にうつし給ひしなりそこをも平泉の里となづけ
今の平泉に逆柴山といふ名あり是も舊平泉に在る山の名とし骨寺
の事尼寺のすゑ選集抄に見えたりそれこそなほつばらかに記しあり
五串の瀧とて人ごとにめでたゝへる飛泉にのぞめば玉の瀧とも名とく小松が
瀧ともいへり京田瀧あこぎ瀧大瀧童子瀧ほうる瀧奥屋瀧
麻一挊の瀧など瀧を平ら飛泉なりこてふなれたる岩にせがれて
ちるなくになるねりかけたるがごとし淡涌きて日影うつろひ紫の波
うちよする岸に桃山吹柳さくらの枝さしまじりて世にたとへつべうかな

なしかはあきらなくも見千て　霧隔のたいつくしく画とも
いかなる筆のえやも及ぶまじきところにいりて奥ふかくねりぬ
まづ見まくこひし田面の路を東にわけえぬ　廿日に立て
新しき時を来ぬる事の小田郡をめぐるはしの山目の驛に出く
大槻清雄の家に詣でほがらくありて清言葉をとりし　珠らしき
をりに待えて時ながらもまかりしてかへりしかば此岩に安ども
めぐりしかばかへりぬるとはつきの人のまたの条小夜をうちひやしぬ
廿一日大槻の屋戸よりいとく近き配志和神にまうづ杜の楷も花
ちり若葉さしてにほひさへぬる嶋のあをもめづらし鳥居の額に御門
泰邦卿の眞蹟給ひしとよ手づりにかいで多し　そもそも此神社は
齋むかしよりと云ひ傳ふ配志和社内に皇孫尊火瓊々杵尊左方に
木花開耶姫命右方に高皇産靈尊をまつる神明神社をはじめ八幡社

鎌足社、安日社、神星社、社主宗社、如此多くふめさとう、全く
見あり、つゑ、菅香梅とて、ちいさき梅もまさりて、こずえも老盛枯とそ不純
なるもけむ枝のなりふ山櫻の寄生あるまく、花いとゆゑ、なほ
とをるよりいろもぎて　いつもまてもちくでもるむ杉の枝の花もさ
きほの色ふかくなりつゝ、此處ふ、菅神の御子、ふとさとく、後
よりさ、ほ、ほ、むりを梅のいとく多なる地すて、乱梅みとひ、蘭梅山と
書ひ、ほ、梅が嶺とひ、梅の森とよ、巻邦郷の歌ふ　みちくの奥の
山の神風も吹つゝうるはしの心寄よ、此風神を、文徳天皇實録、寒
仁寿二年八月乙未に、辛未陸奥國伊豆佐味神（宮城郡式伊豆佐賣神すなわち）を奉
考志神（氣仙郡式考志神すなわち）志賀理和氣神（斯波郡式）並加正五位下、衣多
宗神（氣仙郡式、祐手神すなわち）石神（桃生郡式石神社すなわち）理計段神（氣仙郡式理訓解段神すなわち）配志和
神（磐井郡式配志和神すなわち）傳草神（磐井郡式傳草神すなわち）並授従五位。そこと見えたり。（武藤氏）

なのれ是と考ふとつふ鎌足社をいひたりあてたりあるべし。
安日社を、神日本磐余彦天皇の官軍とをもきなりし長髓彦
兄なる安日其御代小津軽の十三湊ふ流さる其後阿陪頼時ゆゑ
負任衣が柵をすめり、此梅赤森山霊地ゆゑなのが館をいと近けれ
上祖の安日と神と祭をりけむ、神星社を忘れ、ゆゑ負任の男
高星二歳のとき乳母ふ抱き乱と避さ津川の藤塙
小隠れさそこふすめり、高星子ふ月日生とよ其塚河岸ふあり、ふ
崩うせて水底ふ埋の為ふる井桁の如き見ゆれ、そこと井戸淵と
ひとが今、名のをしまさ河戦其ゆゑ、鼠の字ふ高星殿月星殿と近き
まで、ひとふ阿倍高星の舊跡藤崎ふ殘り、主宰社ゆゑ
あるむいとあるめける神號ふ、ゆゑ津軽の妙見社の技神五十嶋社あり
蝦夷を、蝦夷とふ是、齊明紀ふ、問光、蝦夷、膳鹿嶋、越穂名と、

其功あるゆゑ葬し塚を祠や建けし伊賀志麻と云夷名今も有
なりいぶし海と云を物の部の事ぞ十首某と云詞い蝦夷人名を
付る示其童子女等が癖と見て生れ世を醜名を又問菊と云る
世を同津州の北良内郡謝のヒルヰ井の藻浦と云所の島字ふるり
そこと太夫と云人その近きを蛇口と云蝦夷住れと云かゝる事を恐
恐き事なり神小勲位のものはせるごと忠誠ある人を神ともむしれ
敵をうしなしいぶ所なりしそ出ろ人あるを所ひてうあらを
酒のむを見て法華集ところ人の岩井の里に園居てともに千を多へき童
はりと清吉むじて語ら陳大樹のを宮つき多り
十二日能生郡庚股の有隣翁やうろく所ひて多もあつぐ
むるしく所るをび去て　ろうひもあきさふすい物ゝを浦
遠く望を多ゆるとあるを遠く　ろうちあをうをうをうを友つる

うゝ孫らしきてあつをを見て多をうをかりそて百でれ座の雷
ちを橋れ咲るる小月のあるゝをうを出て新まかける無郭の額の
文字をゝをく座に年をみをを　樂しさをうをうをもをうをを
月あるをもをみるつこのわをを
十三日膳澤郡あるを所ある花あるしを見ふるれと大樹清吉をに
盤井郡山目と書く伊治郡衣川の橋と落る衣の館を再宋と云を
いふゝ跡あるとゝを聞て　時も今学や郡の事のうをを衣の
關をゝうを出てあけ夕を近を前沼をつく十日入をうて鈴木
常雄の家を訪ゝいふゝ此あるをいをの中をを書く續紀世三卷
天宗高紹天皇先代帝寶亀五年六月壬戌陸奥國言海道蝦夷
忽發徒衆焚橋塞道既絶往来侵挑生城敗其西郭鎮
守府之勢不能支國司量事興軍討之云々と見えそ七年二月に

庚辰の癸陸奥軍三千人伐膽澤賊をなど見えたる地にもつきて夷
賊のミ多く住みけむ処鈴木の家の庭にやしろありて長者神と祭る社
いくつもありて祭りあつむもとは長者などいふ家ありし地とも思はれ
ぬなどいひて是を考ふる人も姓に長者あり、もと日本そ男子七人
ありけるを長者とて盛衰記にあらはれたる驛の本陣にて長者と
よばれし事も見えて軍書伊勢物語といふもの在原業平など将軍をよく
膽澤郡に長蛇の備をとりそられし事見え其いくさに勝利あるとて神といひ
そてやどりかけて長者神といつきてなど語らひあへり
十四日あした常雄大槻清古などいざなひ連れて水澤にいたりしほがまの
花見てむとて出たつ中そのやまかれいたるとこそいとらくいその代なりも
鹽竈の御神をうつし祀りて四の釜をすへつる花のもとにさくらまうで
たまと盛りにして咲るなど人さへらちるがめ歌よみ詩つくりそうしも面てつもてなす

ぬる空も花のかげまでともなどきぼしつて見ありければ面をながめや
丸里にみれば是る路かう人をも知りいあれば我よりも大林寺に至りて
此寺の曇華上人を訪ひきてより語り話なかに入れて語りまうり
十昔の為に鋒波般若晴あり名もきなれの言や語の花見れ是を遇
の上人をはじめ此近きわたりの人々によき事の花のことかまいられ
きなれの手引くにてなるをゆしきさばかりの風もなく其の楽しさい
ならぬに神ぬしが心ろひまして人々圓居して歌よみて神に手向
まるせんとて社頭花といふことを題とうまくこのみきたれいなぞ
など神垣に白妙におるじちのなる 寛戩 あなもがな宮やせ
御神が祀て掛てそ白の花ぞもとも 信包 玉垣の光を
神のこそ咲よちそ神の恵か多くひなかるけし 親賢 ちはやふる
神も恵の色をそへて御垣の花やさえ咲白らむ 僧曇華 若干

はしるのりへ

こゝかしこにもあなたの神もうちそゝきてむ、氏喜（ウケヒ）の神の社の
人々と共にふしみてなし。神垣の花は並みにみそめ縄かけたるを
鳥居もかけたるもの、夕されば近くこゝに出て大林寺に人々うちはへ
かくて布をなびかせ見る事なりもさてあり、思ひ寄るも
こと葉も浪の音さてあく道をさせる人々と常珠（ツネヨシ）とよぶ
にある返し　浅からぬなれてわかの浦人をこゝに見る浪のよるもあかし
小夜ふけて更るまでよみける人々の歌も多かれどさて記さ
十六日　此寺の背向（ソトモ）の小田のあと口ずさみ焼米（ヤイヨネ）をまゐらする男（ヲノコ）
あり　何の料に志すやと問へば、これ稲田の蝗（イナゴ）のねざる咒（マジナイ）と
まいりかくて参れば近辺の人々ども集ひ来ぬ
十七日　夜あれば花あるまでいかでもこゝにありて見るに曇華上人
なさけある安き給ふ　上京ひ夜ふる袈裟衣花にぬる夜の数ぞあへる

十八日　ある翁のいふ、近き山里に婚姻（コンイン）あり、片田舎（カタイナカ）にて珍らしき
事の多く見せ申さむといざなへといへば、此翁にいざなはれて水沢を出て
その山里に道はるかにいたりて、嫁（ヨメ）の隣の家の内に在りてこれを見る。花嫁
七戸（ナナトコ）銹鉄水などいひて、其歯黒（カネ）母（オヤ）も来りて外に筵（ムシロ）しき若き女
あまた集まりて、此未通女（ヲトメ）が額に鑷（イトカリ）と云ふ事をなすなり、麻苧（アサヲ）
の線糸（ヨリイト）を左右の指にて此糸をもちてかけ、かひ磨（スル）に顔の生毛（ウブゲ）
剃り（ソリ）ある如くことなる剃刀（カミソリ）の用ゐざるとあらし、かくて髪結ひて
紅粉（ベニ）白粉（シロイモノ）などいふものつけて、翁のいかでとけや彩色（ニゴロ）といふ、こゝ
此あたりは揚彩色（エドロ）事とかといへば、志ら翁がいふ、その婦人（ヲトメ）
縁綱（エニツナ）とて、能狂言（ワザヲギ）備（ソナ）への婦人（ヲトメ）の鬘（カヅラ）布の如く、額（ヒタヒ）にあて、後（ウシロ）さまに
むすびて下げぬるを、白布あり、紅布あり、麻布に緒布あり、福者（トミウド）などは
此縁綱（エニツナ）にかけて、いもし遠き、馬近きを歩ませて、聟（ムコ）の家近けば、先（サツ）

はしるのりけく

ある男新婦を負ふしその負ひ肩荷布まさに守布にて八尺ばかり布にて負ひまさに守木にて二尺あまりの丸木勝軍木にて作る老て老ふ丸骨ゝ地まで著て修ゝし守木ま婦人の二本紙二重小包て水引にて陰結陽結とゝ事して世守木ま婦人の腰掛て負ひ出てゝれば聟の門に菅莚重敷め聟の莚と上に婦の莚を下に敷べきと若雄等嫁の莚と上に布てしとあるゝ壻の莚のたゝれば聟の別れ出ぬ孔ゝ孔ゝ手毎に持て大ゝ小ゝ手毎に持て大ゝ小ゝ老ゝ出て是を貫ひとゝ事して左右にゝ二ツ結ひあげて世間ある学木のうけ常清水天地和合の掌入り出ひ出て嫁を主の莚より出て水を飲め婦人の袴と嫁人小着ぬそを前礫積と後後腰を前へ當て聟の家に横座蹲ひ袴ハ取りぬ世夜を明あく燭燭と用ひ三ゝ三ゝ大巨松し世ま八寸基とゝ九寸とゝ平器てゝ角とゝ外吉實風多しかゝて夜明ゝ馬にて夜明ゝ

ゝ祥尚の家を訪ひ
ゝ出もて来を
ゝ祥尚
ゝの家
ゝの清し出ゝ清き月の小夜中
十九日ゝ祥尚の人ゝ世ゝ人ゝ
ゝ世で樂ゝ三ゝ
ゝ小幡為番のゝ
ゝ為ゝ
ゝ植ゝ
ゝ袖ゝ
ゝ通高業とゝ
ゝ遠き世の時ゝ
ゝ世路

とふらひあへり祥尚をはじめ通高爲秀綱松(ツネ)などもありけり
二十日朝とく大林寺に行く雲華上人庭の山吹盛りなりとあるに
ふることなど語らひつゝ遊びてあれどもあはれはかなく雛を
見せてやの花はさらにまた来り見む　雨晴れて旭影(ヒカゲ)も白き山吹の
露にあみこぼれる白き群鳥　廿一日あしたよりあめふる
廿三日ゆふかた立出て佛墨の人をとひける曇花上人にもはやかくなむ
老たまへるものの心ものしてかたみにあひたく外まで送り出て帰りける人や
侍らむも雨のふる花橘の咲くころとあれば返し　言の葉にあらし
言の葉の白ひそへりて明日も見む帰りて別れぬあはれちぎ
氏喜の翁　帰りてはこふる心のひじりかとしを遠きを見ると
よし取るよも　返して　あまりいつまさしてれかしくきく
はなれすきしを見かり信包　うちかへすらむ井上ありぬ

する事ぞてそ山時鳥　返し　鳴つゝもすゝむをかへすに別れてそを
人をとふのみならずきけばかく今は別る花見て鹽竈神社(ミヤシロ)
みまうづいと多かる花どもあれば見るまでもなし　祠のつらがいふ
社にちる花をこそあかずも飽きぬめれ　社司(カミヌシ)佐木鏧智
の家(ヤド)を訪ひ語らひ別れてことめでたふ守にて掛れ山にれ散散
を見ぐる徳岡村来りぬ村上氏のもとを訪ひて去年より雲
下なる山わび櫻の今散りなどみのかへり見ありけめいはする
も一ひらめおもしろかるなど人の言　去年よりも雪にめ隠れ
さくらをもいさはこ戸にあり咲きぬまでありてあはれ
良道よりもかへりてひとなりこゝろ三四日ありに毎風そはし
廿二日内場(ウツニハ)に磨臼(スルス)四五つをすゑて男女戯(タハフレ)廻しつゝなかげて唄ひて
ゐるは河を隔て艣夫(ヨセセ)を持(モチ)て舟より棹(サヲ)よりかゝる氣ふかくあるとなし

返りも返りもその意と　舟もくて渡る渡も
ゐるなとひ川こそつまかくれ陽のある云ふ　良道云庭の
盛りの頃をうるはしと詠ひ書んとあるまつがそのこころ歌しる歌とそ
書動かさるるとなりとも花ぜる　こそのつゝび蟲とまもくれねゐ
のあとと片枝を見たものこしくさ　ゆあり笠くさ返　秋の枝を
まを咎めるうもを色あるきくの心ものとてをそえも
廿七日らん色より雨いとくありぬ　蓑笠着るうこそこうぜ
あるとまるとそれ　北春平泉の毛越寺の衆徒　皇都小答ぶ
ゆるとあが父母の國富　富うまやある殖田義方　のくく文通　あるこしぶ
其書の返事　来ると　返事　返　うれるふ袖　ぬも
事ものとむとひくる　送る　あるの　あるの　良知良道ほうを
の歌あるいとこと人の歌とあんどとふを　ちしぬ

十九日　本のいとかくとこ　成りあ　中ふ時　島の鳴　と童の集り
あるぎ　町　徒　とひとり　と　世島の鳴く　似　諺　あ
蔵小町　ふ　肆　市立　より事　時島　五月　ふ
子　も　田　島　あり　海　小鍋焼　郷　あ
こうべやきとふる事　むり　男子　者　ふ　ひんぐ　君　太郎
二妻の兄　次郎を後妻の第　世弟　兄の外小出て
居　ぶ　ふ　れ　小鍋煮て　事　物者を
兄　外　来て　其　ふと　ぬ　兄　見せ
あ　ぬ　兄の来ぶ　ぶ　ふ　ぬ　一人是と
喰ひ　ある腹　ぬ　ぬ　北月中　列家　ん　死う　其
ぶ　霊魂　霊　化て　あ　ち　ら　ぬ　ぶ
ぬ　ひ　鳴　ぬ　其　り　和訓　出　尾　く　足　東海道

「本尊懸(ホンゾンカケ)タカ」と鳴といひし杜鵑(ホトトギス)の字(モジ)も書くべく多くある水当作りの翁と
いひしを尋ねし事ぐあるはつかき童物語(ワラベモノガタリ)に一とせの夏尾張の国
名古屋にて五十六(イソヂムツ)年なる男子(ヲノワラハ)ありしが病ひの床にありけるとて人あまた
うち群れたり時鳥(ホトトギス)の頻(シキリ)に鳴(ナキ)しと此稚子(ヲサナゴ)の聞(キキ)てうち笑ひ人に若子(ワコ)に
父(チチ)一つ巣に鳴(ナク)ぞと問(トヘ)ば此童(ワラハ)「父(トツサ)へ母(カカ)へ」とぞいふ居(ヰ)たる人々悲しかりと
うひとをあかしてあはれ笑ひし事あり其子麻疹(アカモガサ)やみて死(ミマカリ)しとの親ども
時鳥いろども黄泉(ヨミツ)のみちかのはや(早)来(キ)やとて父母を呼(ヨブ)と初音
より悲の涙(ナミダ)を流(ナガ)して時鳥(ホトトギス)の鳴けばある翁にも耳をすまして語れしを
三十日(ミソカ)に立ちよりて時鳥の鳴けば　ありとぎすして来るなりしとぞ
夜に咲く花の両月をゆるさちりかゝる
五月朔日(ツイタチ)あしたを此家(ヤド)を出立て去年より副むつびあへる人々はなごりをしびあめ
いくなどおりて騰郭公の鳴けば　「時鳥なかなかみるに見る暮るゝ

ばかりの名残ますてか　ありがたうちてくらく
二日まかりぬ去年よりかふれ歩ぶるちこりつる人々の情さたてくる
名の別れはむ孫うちきこり涙おつる心つきも己知られにあまひて
たづねは良知の弟(オトウト)良道の云　別れても道のちさとを名六とも
くさつ法あらぬ人道の石去(フミ)とあまえる返り　出かゝり　毒のいくまを
まね法見ん日りうちみくよしあろ歩きも　とて外(ト)に出れば家々
ある名がり路の郊まで見送り出る　おりひまれ去年よりあれて思ふ
いつぐあおれし袖のおそふれと　良道まで　言の葉をふるひ記念とく
みちれくれ去ずの山ぞともなふ続けき　あふして人々とわかれゆく
村上良知を前沢の驛(ウマヤ)に在りけるいぞみてまで送りむと良知の子ども
総角(アゲマキ)なるめをうちあるたりしつて去年見し　名も文字の流(流の書き草書)　ゆかしとみ見えて
かでる前沢の郷(サト)に中に出で良知の母をあかりふられば　あはれにはいかなる

ちくろのけり名一

十九

いづこにもおなじ心の友ありとも　良知のいる道　別るゝともかなしむなかれ
友なきの身にてぬるかれあるきこゝろを　此夜は霊桃寺に泊れ
此寺に三四日はあれなど長老あへ給ふに謂ひ置く
五日なる新木蓬菖蒲（よもぎしやうぶ）ふける事にて国よりくるも陸奥の實方中将の
故事（ふるごと）ありとて五月五日にはかつみをもあやめにかへてふくするよし
といひ傳へける宗祇旅日記又藤原義孝の歌に　あやめ草ひくてもたへ
ゆく長き根のいかであさかの沼に生ひけむ　とよみたるくさとて其ものは者に
にて中将の君くだりて何のあやめをもえぬ　ふづの軒端にふいて都の
あやめくらべたることかつみをみなせられたるより此事ともいふ　古き圓位上人の
野へまかりけるにあふりぬみをあきやけも見て　かつみ多く態疑せう
でのやかるもとだにこよひくるめとぞいひけり　著聞集に見えたり　さり乍らは
浅香沼あられ生ふる草にて紀の國にも葺けるなりしにてそあるめ

かくれかにこもりとかはりて今はたとあれと思はぬふく　かつみふくやどもてなせ
ないけもあやめ草ながき根さしの時代をあらためて新に幡意
男子（をのこ）ある家（やど）にはいづこにてもとはしをつき例（ならひ）あるを世里にては女子（をみなご）
撥（もく）る家（やど）にてまたたてし小兒（こなむ）門にても此みさどめ門をことさら毎めて
さしけぢめあきは出羽路（いではぢ）も言わざ一こまひきうつしまかね似たり
安平（あむへい）廣長（ひろなが）かりしあらへいおほひるこえふにあれそ　時鳥ありつ五月
あやめ草かゝる花やかなの新たあがりて　とある返し　言の葉を
菖蒲も草かれ茂あ　あるにかしみ時鳥もしも葺きとも
六日那須資福の牡丹（ぼうたん）多くと盛んとて人々まさかられて見にゆき
くだ雨けしきばかりぬりて晴ぬ　ぬれて聊もかかるありまつまゝ
五月雨れあるもはつかの草れ散く　那須氏のもとをたちまたく
七日ごと近き良友の家にを人も来集ひあるじめくやさでう

[illegible]

九日、名所里を出て、[illegible]良友

八日、[illegible]、面白れ例の人々来けり

白あじもとれて[illegible]返し　いひ出ん言葉も

夏の夜ありつるる[illegible]月の別れ　廣長　別れ[illegible]

[illegible]逢事を毎のまれ[illegible]　又つと

ちぎりもやで老の身の[illegible]袖を[illegible]　廣影

別て袖のかけてちぎりむ別てもまあ[illegible]返　別れて

[illegible]名をあれど袖やぬるらむ涙のるひ　正保と[illegible]琵

琶法師のあ[illegible]　別れあつ心を通へ[illegible]

のてもなどある返し　[illegible]

[illegible]　霊桃寺[illegible]僧菌雲云　結文数月如同盟

宣計高楼北送卿、請見陌頭揚柳色、回風猶耐牡鵑鳴、あり

ける韻の唱しに字を[illegible]返

[illegible]卿の[illegible]返[illegible]景心を

[illegible]れて[illegible]いるく　那須資福　[illegible]

[illegible]月の今[illegible]の見れを返

[illegible]　あるで見て月を[illegible]屋

[illegible]袖を[illegible]　方長

[illegible]名[illegible]　桃英

[illegible]　返し　[illegible]里[illegible]

[illegible]の句よ　[illegible]

[illegible]の五[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]六日入邑[illegible]　鈴木常雄

[illegible]　[illegible]百歳の老嫗あり[illegible]

長寿を祝て酒さかを贈[illegible]　[illegible]

如美河の舟渡して江刺郡小[illegible]　行道と[illegible]

其家ふ[illegible]孫[illegible]五十歳の男[illegible]

なじかきはるくの道とおどけの酒さかなる老女の前にまうでけるを老女そ
麻苧の縷うみ居けるが糸うみさして耳のつきぬ耳いとやく聞きなく
髪ハ黒髪に白髪の数もなく歯も一歯もおちず目もくらくて見えぬ
七十八十ともいはむ三輪にむけぢめも見えざりし此の嫗といふもの
あつまべし世にかかる人もありけるものかなとて國守よりものかづけもの
給ひけるなむ語り此老女に酒すゝめその末孫杯とて人あまたありめ
ぐりも此嫗十三歳此宿に娘婦ありて来て八十翁の子は五十の
孫ありけるがやゝ世をさきまで孫どもびに盃めぐりふめぐれば酔ひされ
此孫なるものは傘をかざし扇を持ちてうたひ舞ひつゝかのもろこしの
ばかの子老菜子が舞ひ戯れて衝れるに似たりと人もてはやさるゝとけて
そゝしぬ　かかる親に仕ふる楽しき人の千とせの齢をも経ん
日をくみちはるくと行道のをこなひけり

十日あさいして日あけて起ころを此江刺郡黒石行道の家に
在りて人に語らひあそびがたき勝言に語られなど京のみちゐる事とて
なにて来れどなと見つ常雄を白りきとよべりてここをめてなれもことども
者のあたるかとひあれば南部閉井郡の浦人宮古の藤原となんいふ語り
さらへとよべば紙張の三弦とりなどしこよつくりして尼公物語とて佐藤庄
司が家弁辯義経の偽山臥となりてやどりし事を語りなどすれば小盲人出て
まさそにとうちて其ゆかり語りよするを黄金砂まじりの山の暮前
七騎片馬をさかえどりきたるを蛙込ぶるのかたりよこごんが河原の猫の
向面きるのむかふの鉞をかれ物語もろこしのとかへるのところなどかたられ
十一日にとろこしの和るも大和国にも此處かも龍門の瀧をとゆきとろきて
瀧のあるを云てみなふいれば市保くる夜さ　松柏高きいはゆ
あつ北川楢かかる瀧の涼しさに萩の開くなる躑躅の盛なると
かくくのりみ絵一

見つゝ行くに、夏草ふまるゝつゆの里のぶかちゝ多くてやつれ
いたらし、行道とゝまれゝ北上川わたりて常盤のとまつきゝこゝふ二日
三日と雨あめにぬれを重ふ、前浄の杉目真門といふ人語ひまそ
今一日二日とゝまるべきよしあり、ゆみまいりきゝたちぬ、いざ
さいれば真間はいざるゝれゝ前浄ふつく
十九日、今日つゝとあそこゝと出ゝ、ゝれゝ人々
修験とおくのあやしげ、ひ衣いろゝもべきと、ゝ所のいろ遠
なみひ衣袖ぬれゝ市ゝ情とゝ見るべき　片雲禅師いま
三ぼうをありてなどゝ
秋風を吹事ぬ文ふゝちゝるゝ
めよゝゝ
そゝ
ゝ
秋風　別れても時ゝあづとれ人の駒も
ゝ
ゝ

ゝ
ゝ
ゝ

廿五日、うゑわたをさなの（名なんとてさるべき）畔ばしりをいくばくか菅笠（スゲガサ）をくとて、千町の南ふ見えわたり、森かげに卯の半ばに笠うちぬぎて、我れも時として、早乙女もとりて、菅笠の雪うあくぬさるとるあるとやうに涼しきさまとやうめかも

廿六日あ〜あ、より雨いとあらぬ、去ひこそ来る賀ろしと、田面のとやうふ泥ぢうゐれて、どろもまれなりて、多もをばオイムとてとうろ笑ひてきまて、祝ひとやそ、行くるふ、迷迷しるとかるあき見ろう、家飯（イヒ）くぐいとあ、蟇蛙（カヒ）するて丁女（ヨウヒメ）のをしく殖女（ヨウヒメ）を星とぐして田面さえ、多ちをもも、面あまぬれをぢ、れて螢のまちとなるまぢるとこやや、飯り来て、をを日ぬき夏、夜ま、多もしをぬいとのさ、ねとひやるべし、廿七日平苗植うゑ、日小雨あれば豊年（トヨトシ）そぬるもいとくらうとびあて、うべも合歓ふ、さるへとるうもあるとも、世ろうあるべきとやうに

廿七日、雨のいとやうまあり、田井も満（テ）まるうち溢（アフ）れ、千町の面を、さ波うるう庭、北加美（カミ）川の流れぬ、小川ふどふ舟まめぐして鱒（マス）鱷（ワニ）奥潮もあやうびし、ふるめあひぶくれ田ぼ丁女もれて、ぬれ衣ろとあるあ波の袖こえくまあ（やるくふ五月雨ふ

廿八日あまてばうこてを出くむとふとて姉体とふあふとる、くとて安彦、中和（ナカハヤカ）、まびと衣袖のわうて別うふ夜の川のせぐ方ふ、ふ、ふる夜ぬ返し、なぐ川ふもうくばう猿衣袖の庭ふ、ちやまとこん、盛方めとうう、別ても別ひて和（オカ）せ多ふ、ふとえど其名を見とれぬ山、返し、情ある君ふその名を見とれずあ山ふと山ふ、ふ、ふ、ふ、祥尚のひ宿は、みちあくの山路ふるう、西てふをもめうあふんとふ返、別れぬふと、ぬふみちくの山ふとふ、ふ、ふ、ふ、守清（ふ）八十ふ高くふ髪、

雪とつもるも繁きをみてはみづから葉とやなる　五月雨のみくさ生ふる
夜川にもりの人をもはるばるあよ　まゆ麻　守清翁の句に　蛍なれば
遠くむさうきやを世義のこゑ　海もくれくれ　夜河あるき
ぬぐさし

廿九日常雄と云ふ麻生と云ふ所へ行る　風ぢい義も負れて庭のせ
ゝなれば山丹花のいくつ咲るを　例の酒進めつる時うりぬ
さうりも咲くやゆそ涼しき

道利義宗それかりけるに中に世膳澤郡若柳荘駒形山麓の金入
谷と云ふ村にて老媼の事をごんごと云ひ三十四歳と云ふきあるとて
ごんごゆめどをしび聖ゐどを姫子をゆひあるじし酒宴あるときは
小謡舞と云ふものありそれを盃を左手持て右扇を動かして酒請
御酌をお玉さゝあきてあまりきもべき方へ海で動かりとてつと

あるゝ人の中まで行うちつけまさるれる人をもとゝ心い
たるゝぜうむじかりつるもかりうきく盃とりて元とつかしあるいうき
あるびなどして又ゝ高く小唄舞をせりかるゝ小歌をよゝ酣まなりぬ
ともあん夏の始め橘の花の茅蜩せの事数筵の下まきおりて乾柳らも
是者ゆゝこの紙にて人よさるるゝのせて低ぬ　など浦りぬさそぶ山里
高風ゐるこもせりかくて道利義宗と云ふ山里
路のひと宮ゝと多し

あるを筆と袖ゝこゞ多く　さるきゆゝわけうゝぬ上て草のはら
六月朔日あるゝいるやゆ筆ゝのるかうう釜舟てみとあと節分の
豆ゝやもゝうゝ蔵羊蹄草などゝ草の銀蕎麦をく
酵ありけば是と舟にて蚕の海ゝ船ゝ多ゝ
ゝして時の間ゝ掃きはめぬ　ゆゝもゝゝがりてつゝひし草の

舟こぎ今夕をくてる裏の多の翔旦を脱月立とひかりして桑の林のとぼそ上りかば空蟬のとあけのかつのごとく魂魄とびさりく人晩のみ残り止るとそ桑の木一ト本又そも思れてこみ替蚕の養もよべかりて手をとりの世も秋田ぶのごと歯固とそ氷室餅のこあしせぐかしあ〳〵れくとりて元るはれて夕れ近く明るとて涼しい

五月 近ぐるの里の杉目真種とよくめをとふいづく作法とて夜初ゆかくひあもかとれば氷鶏時ぬ 夏もすがら殘る鶏の初やの戸を叩きもそとあくる夏の夜

六月 杉目の屋戸を出るふ真種 別れかねあ〳〵ぬ絶えの思やる心を通へ知わくの橋とあり〳〵ぶ遠 われてそ者〳〵そあるあ知をはくの橋を心ゆけてわとれし常雄のとてを照七日つあそこ出あちのしとゆ世家小保元平治の世の乱のころ

出るる傳へる札をる小櫻威ぶりくそ岩あり破れる鎧家是常雄ご前祖鈴木兵庫頭常信の甲之鈴木常信鎮守府将軍源朝臣義家卿の家令ぶをつ将軍の真筆給し感状あり常信を数度の戦ひ勲功あり武士ぶ世ぶ小勇士あり出義朝将軍とはじめ北畠顕家卿まで代ぶの感状五枚あり手掌丹ぶき いとく小く兎の皮布る鞆あり唐鞆てあるあ結鞆みどの毛ぶし あと古物心歓る出るる鎧あり横刀あり手ぶ家の幟幡あり そを頭ぶど包ちくるとあれ出くある家の来歴 あ鈴木養作常雄のいてく吾世ぶ世代と絶ぶかく今を民家き家 ぶ〳〵世ぶ千歳近きあ〳〵ぶ守りもるべしそて子孫贈む故郷の裏小ぶて手紀けむ草ぶや栄り家を久しき あ〳〵常雄ぶ

[illegible]も詠ひ来てなどありて　浦波さゝ[illegible]ものかもちきりなく
事ぶりなれる末のまつみとある歌の返し　別れより末の書
こゝろもなほのあらねふるけるさのびむ　面のいとゝ寄り来けり
家の人ゝ[illegible]みさゝぶねゝ世尊小　面ふりてのかどあれ常雄　年のこと人々
さゝめもこゝろをもなるもとそれ　面ぬ者ゝ[illegible]ゝ　ある面茂の小
笠ふたのぎてもあさひの長ふ　袖ぬゝ[illegible]あるの聲なりけれ
鈴木常義　[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

察れて、今をさかりなる祠の神ゐませ、人をなそらえ初めなる
くこゝを尋ねむに、北北上河と、加美川とをよびむ古、神川にて
北河上小石手堰御神鎮座まもるとして加美河の名ゝ流れ
ものを考へ、此前よりぬるぶ、いりでゐれ神の地あれ涌出
きふるべめ、ほくして、安彦中和の面まち、みこの
清き流を絶ものめ、神こそ、ばし
佛ゝ面ゐ、ゐ、ゐ、

多くて事なし。酒酤（サケウル）の胡床（アグラ）小人あまた居て濁酒（サケ）飲（ノム）てふ
ふけむ西根の池（西膳澤郡小舟多天地）の鯉（コヒ）鮒（フナ）や白鼎（ハナコ）の聲（コエ）を唄（ウタ）ひ今あとうのあら
男（ヲコ）面（ハホ）を丹塗（ニヌリ）二王の姿（サマ）してある世中やますこて飲（ノム）けれど價（アタヒ）なしや
腰鮒（腰錢（コシゼニ）とまむり錢と鮒（フナ）小鑄（コイ）るまとをとくくを足て考ふ蝦夷人貨料をブンヘトまフンヘの約りるブナ字也）
と酩酊（ヨヒ）なきもれば後なる谷いろ
あるこのやつる日ごろ金一分あり是ゆるをべしんがも
飲（ノム）へと投（ナゲ）れば酒店（サカヤ）の女あの前へまを錢をこしあるべかりをとまを
なるとふをへいとをひて提（ヒサ）ふををいうをの物ごと曲（ただ）てをのうち
ゆるもををりける。味酒（ウマサケ）ふをれいうをもをる山の歩張（ホバリ）
物を抱して、他夜を田河津（タカツ）より歩くなる。
十五日ふをあまつみせぐそろ世あちみをも山をも水をもふく
多く狭衣ふ水戀島のひ給とふ世をの事ふ唱多あれば

家居（ふををのりつをを）

家居（ふををのりつをを）

家居（ふををのりつをを）

[illegible]て内陣に弥陀薬師観音安置まつる。また小葉山の
観世音、圓仁大徳の作佛、其菩薩堂もあり。それそしらく
此山の禁鹿を小丁とて翁夫婦あり。えびもこの山より谷へ
出の實草の実を採り草の根を掘りて くひものとして世わたり
いとを観世音と拜なるべし。あるとき山鳴り谷ゆきて圓仁大
師の加持寒泉ありしに浦上のやしの実とやら小丁おとろ
きこれを見れば黄金佛あらんまでもなく其ごとのみ[illegible]
却の家より来て紫棚を構へて[illegible]あげれあるべし
我子一人有て[illegible]あげれ祈れば二人の美よ比せちなる
こと[illegible]ふまうもべし見ねどもきいとぬつぎいとぬ
いとぬの中に男子[illegible]恐さそなる[illegible]名と大愛と
つけて大愛とぞ[illegible]ぬれば如来尊きみすがたを[illegible]

却の埴生に[illegible]事[illegible]とて他所のふるさとにもなりしとぞ
七十五代崇徳院の御宇保延二年丙辰の[illegible]名取郡の旭神子
補陀洛山の菩薩[illegible]の札[illegible]陸奥守藤原準房卿の[illegible]
名[illegible]誓[illegible]作佛[illegible]
集に見えたる謡曲[illegible]名取の老女の事新古今
事[illegible]此山に鉏鍬[illegible]
[illegible]知れるなるべし小蛇いでたるもあり出るそいるるとぞ
十八日こゝを出て大原里に[illegible]
芳賀慶明の家に河[illegible]
[illegible]夏夜の[illegible]神の[illegible]

二十日こゝを近江日出みまくゝに芳賀慶明云世暑ゆゑこゝへ引取
秋の末ゝに松嶋雄島の月を徙くゝ見てまた夏のくるゝを世川のべの家
ゆゑて暑を避るなどいとゝもごろ寒え付る事のうれしうこゝろちゐぬ
養蚕の多くれもうるまぶしの月ゝ小雪とすがるゝ外よりの太麥刈りて
はつゝゆゑ取り付けて報こゝの西間ゐくてとゝるきをうれひあり

廿二日　河夏　秋とゝて

みそ紀川つゝを流よ浮ゝひて
ゝのこゝろもちゝこゝ

廿四日家ゆゑとある人こゝ季忌宮精進せゝ多八幡宮ゆゑ詣て世
寺ゆゑ訪ひてゐにそれかゝゝゆゑ住僧の云享保の云ゝ引ゝむ世寺に省映
上人こゝおゝきゝとく好人こゝある頃多る中ゆゑ　表をる唱子の網も
長き夜の月ゐきこゝを小田のまゝゝ雄　とゝ頃を世よ知られる
頃こゝとゝゝまこゝゝゝありし頃人こゝ切られゝる

廿五日台平寿峯ゝ登ゝむこゝ芳賀慶明を誘ひ人こゝゝ
群れゝ吹上ゝゝゆゑ人ゐゝゝ引ぬゝ船を風ゝ乗ゝ
ゐゝゝゝる苔のむゝゝゝに圓居せゝ　ゆゑ世月のあけさゝ
祝ゐゝあびの風ゝ涼しゝ　ゝゝ月ゐ夏衣
ゝゝみゝもゝゝ風ゝ吹上ゝゝゝこゝ帰ゝ　慶明　ゐのゐる在こゝ
君ゝ鼻ゝゝ山あり世ゝ撫石ゝゝ辛ゝゝゝゝ人こゝ見行む
こゝゝゝゝ見ゝ觀ゝ　ゝゝ峯ゝゝゝ元ゝ印地勝ゝ
君ゝゆゑゐの高サゝゝゝゝ人こゝ第ゝ　尾越山領こゝ小世ゝゝ
ゝゝゝ世ゝの鎮屋丹嶂ゐゝゝ新山本山ゝ神社ゐゝゐ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ世本山ゝ養老二年戊午九月十日
陸奥守鎮守府將軍従三位兵部卿大野朝臣東人建之と棟
札見えゝ室峯權現ゝゝ内ゐゝ十面觀世音と秘まゐゝ

こゝ四十四代元正天皇御即位の霊亀の元より三百年を経て天明の
今年まで千歳餘年やあらむと新山權現を九十四代花園院
の御世正和二年癸丑の年陸奥司葛西形部太夫清信建立せ
あるなり聖觀世音菩薩を祭る　常磐ぎれば心も澄むなる山
峯より尾ろうばく帝山風　芳賀慶明　くうみやび並
居て諸人のあつくも高し　弘の泉と　圓仁大師護摩おこなひの
跡とて梵字彫る石苔ふ埋れ　高き狩よめれば氣仙郡の浦々時
二渡り金花山をこゝ　そのむくゝぞる中ゆ見えそ　乙女ゝ　いもとも
ゆ　人ゝ摂子ゆ筒ゝきて坏とりぬかくゝ山と下れ　ゆるゝ　ゝ小
高ゆ　ありそこ白牛の卧る形して方解石あり　真白なる　ゆ　上品
石し　世の泉　葉なる山里ふ佛ゝ　家の妹人ゝ　ゆつあの　ゝ
ゆせゝて蕎麥の餅ゝ　ゆて進ゆ　人ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゆゝて　ゝ　ゝ　ゝ

三代實錄ニ
良多宗神
理計明神
とある要本
ヨリ誤字
落字ヲ補

てゝも山里、　こゝとあり、くらくゝおりて芳賀のとゝ寺。
廿九日、水無月もそのとくぎうみ、これりとなりいる、都都喜石神小
まうでぬ、ゝ阿倍比羅夫あり、ゝ虫磨朝臣などの寄附品もの
もありて、むし、繁、ゝ、黒麻呂の祭とそ、ゝ仕ゝ、　ゝき事と万代ゝて
續ゝ石の神の恵も大魚の里、ゝ、ゝ、ゝれど、その時世の風ともなりうゝ、ゝ
貞觀のこゝ、山城國大原野の大明神と齋なりしゝ、ゝ、ゝ寺を
續石山大原寺ゝ、ゝ、ゝ、開祖ゝ圓珠大師ゝて藤原清衡豊田
の館ゝ平泉へ移り来て吾館の鬼門を守護給へと、誓願ゝ、
此神社ゝ本地ゝ藥師如来ゝ飛て圓仁大師の作ゝ、此石神ゝ、ゝ
古ゝ神ゝ、ゝ、ゝれど石神ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、文德天皇實錄四卷ゝ仁壽二年
八月乙未ゝ辛未、陸奥國ゝ衣太手神、石神、理訓許毀神、配志和神
僊草神並授從五位下ゝ、ゝ、ゝ、　治ゝ、ゝ代ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ

石ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、